

日本エッセイスト・クラブ

2020 秋

NO.72-I

会報

第68回クラブ賞受賞作



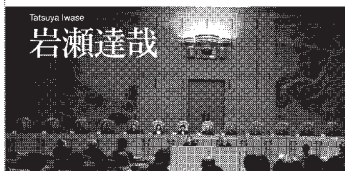
第68回 日本エッセイスト・クラブ賞

受賞作

裁判官も 人である

良心と
組織の
狭間で

Tatsuya Iwano
岩瀬達哉



100人を超える裁判官への取材でわかった苦悩するエリートたちの素顔
あなたに人が裁けるか？

第68回

日本エッセイスト・クラブ賞
受賞

講談社

裁判官も人である 良心と組織の狭間で

岩瀬達哉

裁判官たちは日々、何を考え、何に苦悩しているのか。100人以上の裁判官に取材したジャーナリストが、彼らの生態を明らかにする。

1700円(税別) 978-4-06-518791-3 講談社

万葉学者、 墓をしまい母を送る

上野 誠

現代万葉研究を大きくリードする学者は、故郷福岡の墓をしまい、老いた母を呼び寄せ、七年のあいだ介護して見送った息子でもあった……。体験と学問を軽妙な筆致で往来し、死について深く考えた、真の「エッセイ」

1400円(税別) 978-4-06-519239-9 講談社

上野
誠

万葉学者、
墓をしまい
母を送る



講談社

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2020 秋

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

第68回日本エッセイスト・クラブ賞

クラブ賞贈呈式

審査委員長報告

受賞作の紹介

委員長 原田 國男

委員 吉野源太郎

委員 秋岡 伸彦

受賞の言葉

心からの謙虚さ

ありがとうございました

岩瀬 達哉

上野 誠

クラブ賞一覧

会員近況

自著紹介

事務局から

日本エッセイスト・クラブ定款

会員名

2 3 5 8 11 16 22 28 29 32 34

2020年 第68回 日本エッセイスト・クラブ賞



『裁判官も人である』

良心と組織の狭間で』

講談社

岩瀬達哉

ジャーナリスト



『万葉学者、』

墓をしまい母を送る』

講談社

上野の

誠

国文学者

第68回日本エッセイスト・クラブ賞は、9月7日、東京・内

幸町の日本記者クラブ内で贈呈式が行われ、上記2作品に賞状と賞金(各30万円)が贈られた。

例年、式と併催している会員総会は新型コロナウイルス感染防止の観点から今回は取りやめ、贈呈式は理事会と今年度の審査委員会とが会員を代表する形で行われた。

贈呈式では、原田國男審査委員長が審査報告。続いて、受賞者の岩瀬達哉、上野誠の両氏が受賞の喜びを語った。

1953年(昭和28年)に創設されたクラブ賞の受賞者は、これで189人となった。

第68回クラブ賞贈呈式

審査報告

エッセイとは何か？

審査委員長 原田 國男



第68回を迎えました日本エッセイスト・クラブ賞の審査の過程を報告いたします。

今回は、21名の会員からの推薦作品が23点、出版社からの推薦が36社、73点、この他、個人応募が17点で合計113点の応募がありました。これらの中から、審査基準に外れる作品を除外して106点が審査対象となり、予備審査を経て、72点に絞り込まれました。10名の審査委員による審査が4回行われ、6月23日に最終審査を経て、受賞作2点が決定しました。この間、コロナ感染による緊急事態宣言もあり、

全員参加による審査に支障が生じ、そのため、例年よりも1か月近く、審査に時間を要しましたが、三密を避ける工夫などして、なんとか最終審査を迎えることができ、ほっとしました。最終審査に残った作品は、以下の7点です。

岩瀬達哉さん『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』

上野誠さん『万葉学者、墓をしまい母を送る』
信友直子さん『ぼけますから、よろしくお願ひします。』

今福龍太さん『宮澤賢治 デクノボーの叡智』

関啓子さん『「関さんの森」の奇跡』

神野紗希さん『もう泣かない 電気毛布は裏切らない』

服部英二さん『転生する文明』

読み応えのある作品が多く、票が割れました。今回も、エッセイとは何かが議論となり、本賞は、純粹なエッセイに限るべきだという意見も出されました。一応、審査基準においては、ノンフィクション、ドキュメントも含む広い基準

が採られています。具体的受賞については、エッセイに限定するほうがよいという意見です。これに対して、2作品受賞の場合は、純粹なエッセイでないものも含めるべきだという意見もありました。今回は、2作品が同等の評価を受け、議論を尽くしても優劣が付きませんでした。そこで、岩瀬達哉さん『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』と上野誠さん『万葉学者、墓をしまい母を送る』が受賞と決まりました。

おめでとうございます。

お二人のますますのご活躍を祈念して審査報告を終わります。

審査委員

委員長

原田 國男

委員

秋岡 伸彦 海老沢小百合

後藤 多聞 高村 壽一

降幡 賢一 松本 仁一

村尾 清一 よしだみどり

吉野源太郎

受賞作の紹介

「人間臭さ」と「本音」

岩瀬達哉著 『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』

審査委員 吉野 源太郎

本書のタイトルは「裁判官は神ではない」と言い換えられるようです。本書に描かれる裁判官の人間臭さは、裁判官の弱さです。そこに提示される著者の問題意識や危機感是我的胸にも響きます。新聞記者として裁判あるいは裁判官個人を見る時にいつも感じてきた疑問です。

「神様でもないのに、孤独や圧力に耐えて、法律だけをよりどころに、どろどろした人間の世の中を裁くことが可能なのだろうか？」

著者の結論を煎じ詰めれば「かろうじて可能」

ということになります。ただし、それは裁判官の身分が脅かされない限り、という身もふたもない条件付きです。著者によると、身分を脅かす最も大きな存在は、最高裁判所の事務総局ということになるようです。この点には異論もあるようですが、残念なことに私が見てきた現実もおおむねそれに重なります。

新聞記者として、と言いましたが、実は私の場合、正確ではありません。そんなことを考え

るはるか以前から私の裁判官のイメージは長い時間をかけて形成されてきました。たまたま私の住む家の隣地に、ある時、裁判所の判事官舎が建ったからです。

最初に官舎が建ったのは半世紀以上も昔、私がまだ小学生だったころでした。隣家にも同じ学校に通う判事の子息や子女が住んでいました。そって私とも仲良く皆、秀才。平和で豊かな家庭に見えました。

歳月が過ぎ、官舎の住民も何度か代替わりをしました。誰が入居しても、そこは依然、近隣でひとときわ静かな一角でした。休日になると官舎の庭から塀越しに判事がゴルフの練習をしているらしい「コーン、コーン」という乾いた音が響いて来たりしたものでした。

私が新聞記者になってからのことです。隣家に引越してきた何人かの判事を、近所づきあいを口実に訪ねたことがあります。相手はもちろん警戒しましたが、私が隣人とわかると、そこは紳士、皆おだやかに迎え入れてくれました。そうなる話が始まれば、こちらのものです。

裁判所に関してはいつも話題にこと書きませ

ん。冤罪事件、裁判官のスキヤンダル、選挙違反や一票の格差をめぐる憲法判断、さらには原子力発電所事故をめぐる訴訟。世の中の激しい変化の中で、司法の独立は保てるのか、法曹一元化や裁判員制度などの制度改革の過程で絡み合う思惑と誤算……

本書の著者も答えを探して全国を飛び回ったようです。しかし裁判官たちの本音はなかなか出てきません。むしろ本書を読んで驚くのは、裁判の内容や裁判のあり方そのものに関する彼らの答えではなく、著者があぶり出した裁判官たちの本音、すなわち裁判所人事に関する異様に強い関心、そして彼らの上昇志向です。

人事に振り回される彼らの姿は、私たち世俗の人間、特にサラリーマン社会の風景にあまりによく似ているのです。普段はたんとと仕事をこなしていても身に危険が迫れば怯え悩みます。

裁判官にも毅然としてことに臨む立派な人もたくさんいます。しかし、立派か悩むか、その違いが実際どのように判決内容を左右したのか

はよくわかりません。著者はそこまでも踏み込もうとします。その取材姿勢には感心します。

日本のマスコミの取材には、おそらく他国にはない特殊な方法があります。業界では「夜回り」と呼ばれるのですが、種々の事件や関連分野の動向について政治家、捜査関係者、公務員、民間人らの自宅を夜、約束なしに訪れて話を聞くやり方です。私の「隣家訪問」も一種の夜回りでした。

なぜ夜かというと、日中は話を拒否して取材を逃げ回る相手でも、夜は自宅に帰るしかないからです。日中は怖い顔で堅苦しい話しかしない人でも自宅では気が緩むし、口も緩む。特に彼らの口が緩むのは人事に関する話題が出る時です。事実、夜回り先でもにこやかに話す彼らの表情が引き締まるのは、話題がサラリーマンの本音に触れるきわどい瞬間でした。

自宅を訪ねるという、仕事なのか私生活の一部なのかわからないこんなやり方が日常的にまかり通るのは「公」と「私」の境界があいまいな日本だけなのでしょうが、しかし、夜の自宅

では時折、建前と本音の間の矛盾が出てくることも事実です。だから面白いのです。

裁判所人事への疑問、退官後の生活への不安……神が人間になる瞬間です。

「結局、長いものに巻かれろということだったのですかね」

「生まれ変わったら新聞記者になりたいな」
別れ際に彼らが漏らしたつぶやきは複雑でした。著者はそれらの本音の裏表を丁寧に追っていきます。

労作です。読みながら私の耳には隣地の庭から響いてきたあの時の寂しげな乾いた音が聞こえてくるような気がするのです。

受賞作の紹介

葬送の儀礼にたいする省察

上野 誠著 『万葉学者、墓をしまい母を送る』

審査委員 秋岡 伸彦

福岡県甘木市（現、朝倉市甘木）で、手広く洋品を扱う商家である。

1973年8月、その屋敷内で病の床にあった祖父が息を引き取ったときのことを当時13歳の少年、つまり著者は克明に覚えていた。

坊さんの枕経に前後して、まず地縁・血縁の男衆がやってきた。次いで白い割烹着姿の女衆が集まり、台所の煮炊きを手伝う。それが、この地のならわしだった。白黒の日本映画を観ているような、懐かしい情景である。

仮通夜が終わって、少年は遺体の置かれた座敷に来るように言われた。「なんばすつ」「じいちゃんば、風呂にいれるつたい」

母と祖母のふたりで行う「湯灌」だった。重い遺体を浴室に運ぶ手伝いに呼ばれたのだ。足がすくむままに、少年は肩にバスタオルをかけた遺体を背負った。立ち上がった瞬間、「祖父の右手がだらりと下がり、私の頬を撫でた」

生々しいその感触のせいもあるが、それにしても、祖父の葬儀にまつわるあれこれを微細

に描写して、著者の記憶は鮮明である。

ご本人も「われながら驚く」ほど記憶が保たれたのは、死と葬送の文学、万葉挽歌を学んだ学者修業の時代、少年の日の見聞を繰り返し思い起こしたからだ。それがまた「私の研究の原点になったような気がする」と。

本書は、祖父が他界したあの夏の日から、母が亡くなる2016年冬までの43年間をたどりつつ、葬送の儀礼にたいする省察を加えている。著者自らはそれを「心性の歴史」とも言い換えている。人々の思考様式、感覚、メンタリティーの変化など、いわば小さな歴史の積み重ねから物事を考える試みだろう。

そこで、祖父の葬儀である。

祖母と母は、まるで愛撫するように祖父の体を洗い清めた。愛惜と畏怖。矛盾するようなこの思いを説いて、本書は一転、「古事記」「日本書紀」の神話の世界に読者を誘う。この辺の筋書き、展開は本書の真骨頂である。

神話のイザナキノミコトは、イザナミノミコトの死を悲しむあまり黄泉の国まで追って、変わり果てた姿を見てしまう。女神の激怒と復讐、

恐ろしい愛憎の物語だ。

醜く、けがれた死者の世界と、清めやみそぎの儀式。祖父の湯灌のあと、祖母たちが着いたものの一切、肩にかけたバスタオルも含めて焼却に回したことを、確かに少年は見た。

家業を発展させた祖父は、立派な墓を遺した。納骨堂の上に墓石を乗せた、いわば2階建てだった。蔵で財力を競うように、お墓の競争もあった。とくに長崎で唐人の子孫たちが、祖霊を祀る霊廟の考え方を伝えたことも影響した。

しかし、「もう、うちにはこげな大きな墓は無理ばい。いまや分不相応たい」。祖母と父が亡くなったあと、家族で相談したときの、これが母の一言だった。

つまり、タイトルの「墓をしまう」件である。新しく手に入れたお墓は、福岡市郊外の霊園の一角にある。石材もデザインも似たり寄ったりのお墓が丘陵を埋めつくしているという。

そして、老いた母を著者が住む奈良に呼び寄せ、7年間介護に尽くした末が、すなわち「母を送る」件である。俳人として、福岡俳壇で地歩を築いた母の旅立ちはどうあるべきか。

厚葬と薄葬の思想の違い、地縁・血縁のネットワークの減衰などに分析を加えつつ、現実に母を送る身で悩み、迷いが行間ににじむのは、むしろ当然のことだろう。結局、選んだのは葬儀場での家族葬だった。葬儀社任せではあったが、湯灌は施した。

「この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 我はなりなむ」

万葉集にある大伴旅人のこの歌は、母も大好きだった。この世で楽しく生きさえすればと、現世肯定の歌の思想に、母の葬儀を決める「後押し」をされたと記している。

さて、しかし今、世界を、まさに現世を覆うコロナ禍は、人々の「心性の歴史」にどんな一節を書き加えることになるのだろうか。



審査報告を聞く出席者たち

受賞の言葉

心からの謙虚さ



いわせ たつや
岩瀬達哉

受賞の知らせは、国会図書館で調べものをしていたときに受けました。資料検索が一段落したところで携帯電話をみると、数分おきに数回、同じ番号の電話が入っていたので折り返してみると、事務局の方から選考委員長の原田國男先生にかわり、「受けてくれますか」とのお話でした。

ノミネートされていること自体、まったく知らなかった私は、ただただ驚くばかりで言葉がでず、どうにか「伝統ある名誉な賞をいただけて光栄です」とお答えしました。

『裁判官も人である』の企画は、講談社の鈴木章一さんが立てた企画です。鈴木さんとは、こ

れまでもいろんな仕事をさせてもらっています
が、この本は、「週刊現代」に掲載する連載企画
について話し合っていたとき、日本の裁判所を
真正面から取り上げることができないか、と話
されたことに始まっています。4年前のことです。

即座に私は、それはむずかしいと答え、とて

略歴

1955年、和歌山県生まれ。ジャーナ
リスト。2004年、『年金大崩壊』『年
金の悲劇』（ともに講談社）で講談社ノ
ンフィクション賞を受賞。また、同年「文藝春秋」
に掲載された「伏魔殿 社会保険庁を解体せよ」
で文藝春秋読者賞を受賞した。他の著書に、『われ
万死に値す ドキュメント竹下登』『血族の王 松
下幸之助とナショナルの世紀』（ともに新潮文庫）、
『新聞が面白くない理由』（講談社文庫）、『ドキュ
メント パナソニック人事抗争史』（講談社+α文
庫）などがある。

も取り組む自信がない旨を伝えたのですが、簡
単にはできないのはわかっている。しかしでき
れば、意味のある本を読者に届けられるのでは
ないかと説得され、兎にも角にも取り掛かって
みることにしたというわけです。

仕事から名誉棄損訴訟で、何度か法廷に立つ
たことがあります。その都度、裁判官は雑誌メ
ディアに偏見をもっているのではないかとい
う思いを抱いてきました。公正であるべき裁判
官が偏見を持つことなどあるのだろうか。その
疑問の解明からはじめることにしたのですが、
以来、暗中模索の日々が1年ほど続くことにな
ります。

出版界ばかりか新聞界の常識でも考えられな
いことかと思いますが、その1年間は、ほとん
ど取材に歩くことなく、ひたすら資料を読んで
おりました。法律関係の雑誌に掲載された裁判
官や元裁判官の論文、あるいはそういった先生
方が執筆されたご著書、さらには法学部の学生
が教養課程で読むような参考書などを渉猟して
いたのです。よく言えば、知識の地固めと資料
整理ということになるのですが、じつのところ

は、法服を着た裁判官の権威に気圧され、最初の一步が踏み出せずにいたわけです。

そんな資料漬けの中で、あるとき、裁判官は憲法で保障されているほどに独立してはいないのではないかとの思いが、ふと、浮かぶことになります。裁判官もまた、最高裁を頂点とする組織の統制の中に置かれ、自己の良心と組織の論理の間で揺れ動いているのかもしれない。だとすれば、一般企業に勤めるサラリーマンや行政官僚とさして変わらない管理下におかれ、悩み多き日常を過ごしているのではないか。この仮説をもとに取材を試してみよう――。

最高裁が下級審の裁判所や裁判官を管理運営する司法行政を、ひとつの視点にして、裁判所の歴史をたどり、裁判所で働く裁判官の素顔の一面面だけでも描くことができれば、読者の知る権利に応えることができるのではないか。そう思い至ったわけです。

とはいえ当時は、誰一人として、裁判官に知り合いがおりません。どのようにすれば彼らに会うことができるのか。うまい手が思い浮かばないなか、ダメ元で手紙を書き、それが届いた



遠藤会長から賞状を受ける岩瀬氏（左）

ころに電話を入れ、取材のお願いを繰り返すという方法をとったのですが、これが驚くほど効率よく、打率にたとえればアポイントの取れる確率は6割といった印象でした。

裁判官の先生方は、ご自身の問題意識にフィットする取材申し込みを受けると、どうにもじ

っとしていられなくなるようなのです。話をするかどうかは別にして、まず、会ってみたくなく。人を見る仕事をしてきたゆえの、抑えられない衝動のようなものがあつたのではないでしょうか。

もうひとつ、意外に感じたことは、取材でうかがつたお話をコメントにまとめ、確認をお願いしたときのことです。いろいろ直しが入るものと思つていたのですが、ほとんど手が入らなかつたのも驚きでした。取材中に幾度となく、この話を書いていいのか。これを書けば、誰が話したかわかるのではないかと念押しした方は数限りなく、あとで直しがはいるものと思つていたところ、これでいいと言われる方ばかりでした。

法廷で証言する被告や被告人などの話を聞いてきた裁判官の特性として、一度語つたことを、あとで都合よく訂正することへの本能的嫌悪があつたのかもしれない。とともに、語つたことには責任を持つという厳しい姿勢も共通していて、感服させられっぱなしでした。

裁判所の歴史の中で消えない汚点とされてい

るのが、長沼ナイキ基地訴訟での「平賀書簡事件」と、その後の「宮本康昭判事補再任拒否事件」です。その当事者や、事件の渦中にある事情を熟知する元裁判官の先生方から、詳細な資料提供を受け、当時の緊迫したお話を聞いたことは、この本の背骨を創るうえで非常に役立ちました。

当時、日本中を揺るがしたこの事件を、中学生だった私は新聞で知り、最高裁の理不尽な人事を批判する記事から、漠然とジャーナリズムの世界にあこがれるようになったことを思い出したものです。

取材を終え、原稿を執筆している時も、また、不思議な感覚にとらわれていました。自分自身で書いているという気がせず、まるで操られるかのように書いている。そんな感覚での執筆でした。裁判所の現状を憂う裁判官や元裁判官の先生方の思いが、私をして書かしたのが拙著であつたのでしょうか。

拙著の完成を喜んでくれたのも彼らでした。とりわけお世話になった元裁判官の先生は、行きつけのレストランに誘ってくださり、奥さま

を交え3人でワインを酌み交す会話のなかで、公権力を批判することの重要さを再認識した次第です。

今回の受賞は、私にというよりは、拙著の誕生に協力してくれたすべての裁判官の先生方とともに授けられたものであったと思います。現状を憂い、正義の実現を求めてやまない彼らの心からの謙虚さがなければ、ひとつとして事実を掘り起こすことはできなかったでしょうから。受賞の栄誉を与えてくださった審査委員長ほか審査委員の方々には、感謝のほかありません。



受賞の言葉を述べる岩瀬氏

受賞の言葉

ありがとうございました

うえの まこと
いんし

この世でね 楽しく生きたらね……
あの世では 虫になっても鳥になっても
はかまわんさ
踊らにやそんな
俺

生きとし生ける者は――
ついには死を迎える
ならばならば この世にいる間は……
楽しく生きなきやー ソン！

努力をしても報われることのない世の中で、
賞をいただけたということは、ありがたいこと
である。人生の僥倖である。ありがとうございました



ました。だから、賞金は、すべて遊興費として散財したいと思う。エッセイストと呼ばれるからには、貯金したり、寄附したりするのは、よくない（と勝手に思っています）。

受賞の時なので、偉そうに大言すると、私は万葉学徒として、教員のひとりとして、さらには研究者として生計を立てている。『万葉集』の研究のなかでも、得意とするのは「文化論」で、文学研究よりも、万葉歌の表現分析を通した文化研究に軸足を置いて研究をしている者だ。また、三十代までは、民俗芸能研究も行っていた。そこから、民俗学の先駆者のひとり折口信夫の研究も行なってきた。これらの仕事は、楽しいことは楽しいけれども、業績を上げないと、求職もできないし、昇任もできないので、いわばあくせくやってきた仕事である。

一方、エッセイは、楽しい仕事だ。こちらは、本を読む楽しみから生まれる読書もの。故郷の九州の人と風土を語る九州もの。奈良や大学について語る近辺雑事ものに分かれる、と思う。では、『万葉学者、墓をしまい母を送る』は、どういう本かといえば、広くいえば九州ものの



遠藤会長から賞状を受ける上野氏（左）

一つということになる。故郷の福岡には十九年、東京の学生生活は十二年、奈良での教員生活は二十九年に及ぶ。だから、私には私のノスタルジーがあって、故郷の朝倉市、育った博多、家族についてはよくネタにしている。

ただし、本作は介護と死というものをどう考

略歴

1960年福岡県生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士(文学)。現在、奈良大学文学部教授(国文学科)。研究テーマは、万葉挽歌の史的研究と万葉文化論。歴史学や考古学、民俗学を取り入れた研究で、学界に新風を送っている。第12回日本民俗学会研究奨励賞、第15回上代文学会賞受賞。『魂の古代学―問いつづける折口信夫』(新潮選書、第7回角川財団学芸賞受賞。『折口信夫 魂の古代学』と改題、角川ソフィア文庫)、『万葉文化論』(ミネルヴァ書房)、『折口信夫的思考―越境する民俗学者』(青土社)、『万葉挽歌のこころ―夢と死の古代学』『遣唐使阿倍仲麻呂の夢』(ともに角川選書、『大和三山の古代』『万葉びとの宴』(ともに講談社現代新書)、『日本人にとって聖なるものとは何か―神と自然の古代学』(中公新書)、『万葉から古代を読みとく』(ちくま新書)、『天平グレート・ジャーニー 遣唐使・平群広成の数奇な冒険』(講談社文庫)ほか著書多数。原作・脚本を手がけたオペラ「遣唐使」シリーズも好評を博している。

えるか、家族の歴史をどう考えるのかということがテーマの本なので、古典研究と民俗学を足場として、自らの体験を語ることとした。介護とそれに連続する死をどう捉えるかということについて、正解などあるうはずもない。環境や経済力に左右されるし、千人千色だと思う。さらにいえば、介護される側と、介護する側の哲学のようなものが、一期一会の介護と死のかたちを作り上げてゆくのではないか、と思われる。自分勝手な哲学かもしれないけれど、私は介護する側が幸福でないと、介護される側も幸福でないと考えたので、八十八歳の母を騙してまで、勤務先の奈良に連れて来た。それも、一度も福岡から離れたことがない母を、である。

本書は、一九七三年八月の祖父の死からはじまり、二〇一六年十二月の母の死に及ぶ四十三年の家族小史であり、死の歴史でもある。地縁と血縁に支えられた祖父の介護と葬式。それは、多くの人びとの時間と、多額のお金を使うものであった。一方、母の介護と葬式は、多くの外注産業によって成り立つものであった。私は、死の外注化と呼んでみたが、今となつては当然

のことだと思っている。私たちは、地縁と血縁のネットワークを維持するための時間とお金のコストをかけていない。だから、介護となるといきなり、家族のなかの特定のひとりが、そのすべてを抱え込んでしまうのである。

しかし、私は、祖父の介護と死のかたちがよかったとは、まったく思わない。四十年前は、延べ何十人という女衆が、三日間にわたり数百食にも及ぶ食事をひたすら作り続けていた。当然、揉め事もある。その間、男衆はグダグダと酒を飲んで話し合いをするだけ。考えてみると、今の私のアパートには、そんなスペースもありやしない。死者を風呂に入れる湯灌の儀礼も、家族の女たちの仕事だったのだ。

私は、今、四十年前とは別の国に生きているのだと思う。介護や死の外注化について、豊かだった日本の死の文化が失われてしまったということは簡単だけれども、そういった無責任な議論をする人は、どのように介護され、どのように葬られるのか。見てみたいものだ。

母が死ぬ直前に私が書いていたのは、「讃酒歌十三首の示す死生観——『莊子』『列子』と分命

論」(芳賀紀雄監修、鉄野昌弘・奥村和美編『萬葉集研究』第三十六集所収、塙書房、二〇一六年)という論文だ。大伴旅人は、宴を楽しむ時間こそ、至福の時であり、宴の最中に、偉ぶって説教するやつなんぞ、猿だと毒を吐いている(卷三の三四四)。また、酒を飲んだ者は、鳥や虫に生まれ変わって、人間に生まれ変われないと仏教經典に書いてあるのなら、俺は宴を楽しんで、鳥や虫に生まれ変わってもよい、と歌っているではないか。

この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫
に鳥にも 我はなりなむ
生ける者^ひ 遂にも死ぬる ものにあれば こ
の世にある間は 楽しくをあらな

(卷三の三四八、三四九、拙訳は冒頭に掲げた)

大伴旅人は、中国、六朝時代の思想に学び、今、ここ、私の幸福こそが大切だと考えたのである。このいわば、中国の実存主義ともいうべき思想は、老荘からはじまり列子に引き継がれ、唐代に至って、禅の思想に引き継がれた。その

流れのなかに、大伴旅人も不肖私めもいるのである。

彼らは、独善的な教条主義を極端に嫌い、形骸化した儀礼を鼻で笑った。にわか「家長」となって介護を担当した私は、母の葬儀についても、戒名についても悩んだが、その都度、旅人や列子、臨済義玄の言葉に励まされて、一つ一つの決断をしていった。とにかく、シンプルにと（あたりまえのことと、とりたてていうのも、おこがましいけれど）。

もちろん、教条がなくては指針が定まらないし、儀礼が外からは見えない心をかたちにする大切な文化だということも、知ってはいる。が、しかし。私には、これ以外に選択肢がなかった、と思う。

「お母さん、それでよかったろうが。しかも、よか賞まで貰うたといばい——」。



受賞の言葉を述べる上野氏

クラブ賞贈呈式



❀ 日本エッセイスト・クラブ賞一覧 ❀

第1回～第68回

	氏 名	書 名	発 行 所
第1回 1953年	市川謙一郎 吉田洋一 内田 亨	一日一言 数学の影絵 きつつきの路	北海タイムス社 東和社 東和社
第2回 1954年	島村喜久治 秋山ちえ子 須田 栄	院長日記 私のみたこと聞いたこと 千一夜一夜	筑摩書房 NHK放送社 東京新聞社
第3回 1955年	木下広居 片山広子	イギリスの議会 燈火の節	読売新聞社 暮しの手帖社
第4回 1956年	小林 勇 清水 一 藤田信勝	遠いあし音 すまいの四季 不思議な国イギリス	文藝春秋社 暮しの手帖社 毎日新聞社
第5回 1957年	小熊 捍 中西悟堂 森 茉莉	桃栗三年て 野鳥と生きて 父の帽	内田老鶴圃社 ダウイット社 筑摩書房
第6回 1958年	大牟羅 良 佐々木祝雄 松村 緑	ものいわぬ農民 三十度線 薄田泣菫	岩波書店 全国引揚孤児育英援護会 角川書店
第7回 1959年	竹田米吉 曾宮一念 村川堅太郎	職人 海辺の熔岩 地中海からの手紙	工社 創作社 毎日新聞社
第8回 1960年	高橋喜平 中尾佐助 萩原葉子	雪国動物記 秘境ブータン 父萩原朔太郎	明玄書房 毎日新聞社 筑摩書房
第9回 1961年	塚田泰三郎 宮本常一 庄野英二	和時計 日本の離島 ロッテルダムの灯	東峰書院 未来社 レグホン舎
第10回 1962年	小門勝二 小島亮一 大平千枝子	散人 ヨーロッパ手帳 父阿部次郎	私家版社 朝日新聞社 角川書店
第11回 1963年	新保千代子 林 良一 石井好子	室生犀星 シルクロード 巴里の空の下オムレツの においは流れる	角川書店 美術出版社 暮しの手帖社

	氏 名	書 名	発 行 所
第12回 1964年	片岡 弥吉 錦 三郎 関山 和夫	浦上 四番崩れ 蜘蛛 百態 説教 と 話芸	筑摩 書 房 赤光 発行 所 青 蛙 房
第13回 1965年	佐々木 たづ 阪田 貞之 秋吉 茂	ロバータさあ歩きましょう 列車ダイヤの話 美女とネズミと神々の島	朝日新聞 社 中央公論 社 河出 書 房
第14回 1966年	白崎 秀雄 西山 卯三 阿部 孝	真 贋 住 み 方 の 記 ば ら 色 の ば ら	講 談 社 文 藝 春 秋 社 高 知 新 聞 社
第15回 1967年	宮本 又次 安住 敦 佐藤 達夫	関西 と 関東 春 夏 秋 冬 帖 植 物 誌	青 蛙 房 牧 羊 社 雪 華 社
第16回 1968年	団 藤 重光 泉 靖一 畑 正 憲	刑 法 紀 行 フィールド・ノート われら動物みな兄弟	創 文 社 新潮 社 協同 企 画 社
第17回 1969年	佐 貫 亦 男 戸井田道三 坂東三津五郎	引力とのたかかいーとぶ き も の の 思 想 戯 場 戯 語	法政大学出版 局 毎日新聞 社 中央公論 社
第18回 1970年	仲田定之助 島田 謹二 芥川比呂志 菊池 誠	明治商売往来 アメリカにおける秋山真之 決められた以外のせりふ 情報人間の時代	青 蛙 房 朝日新聞 社 新潮 社 実業之日本 社
第19回 1971年	池宮城秀意 大谷 晃一	沖縄に生きて 続関西名作の風土	サイマル出版 会 社 創 元 社
第20回 1972年	堀 淳 一 角川源義	地 図 の た の し み 雉 子 の 聲	河出書房新 社 東京 美 術 社
第21回 1973年	鳥羽欽一郎 斎藤 真一 樋口 敬二	二つの顔の日本人 瞽 女 地球からの発想	中 央 公 論 社 日本放送出版協 会 社 新 潮 社
第22回 1974年	上田 篤 川田 順造 早川良一郎	日本人とすまい 曠 野 か ら けむりのゆくえ	岩 波 書 店 筑 摩 書 房 文化出版 局
第23回 1975年	加古里子 木村尚三郎 児玉隆也 松本重治	遊びの四季 ヨーロッパとの対話 一銭五厘たちの横丁 上海時代(上中下)	じゃこめてい出版 社 日本経済新聞 社 晶 文 社 中 央 公 論 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第24回 1976年	中 野 孝 次 渡 部 昇 一 高 峰 秀 子	ブリューゲルへの旅 腐 敗 の 時 代 わたしの渡世日記	河 出 書 房 新 社 文 藝 春 秋 朝 日 新 聞 社
第25回 1977年	沢 村 貞 子 杉本秀太郎 亀 井 俊 介	私 の 浅 草 洛 中 生 息 サーカスが来た！	暮 し の 手 帖 社 み す ず 書 房 会 東 京 大 学 出 版 会
第26回 1978年	野見山暁治 藤 原 正 彦 長 坂 覚	四 百 字 の デ ッ サ ン 若き数学者のアメリカ 隣の国で考えたこと	河 出 書 房 新 社 新 潮 社 日 本 経 済 新 聞 社
第27回 1979年	篠 田 桃 紅 斉 藤 広 志 百目鬼恭三郎	墨 い ろ 外国人になった日本人 奇 談 の 時 代	P H P 研 究 所 サイマル出版会 朝 日 新 聞 社
第28回 1980年	三 国 一 朗 太 田 愛 人 小 松 恒 夫	肩 書 き の な い 名 刺 羊 飼 の 食 卓 百 姓 入 門 記	自 由 現 代 社 築 地 書 館 会 農 山 漁 村 文 化 協 会
第29回 1981年	関 容 子 古波蔵保好 両 角 良 彦	日 本 の 鶯 沖 縄 物 語 1 8 1 2 年 の 雪	角 川 書 店 新 潮 社 筑 摩 書 房
第30回 1982年	足 立 巻 一 伊 藤 光 彦 岡田恵美子	虹 滅 記 ド イ ツ と の 対 話 イ ラ ン 人 の 心	朝 日 新 聞 社 毎 日 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会
第31回 1983年	舟 越 保 武 藤 原 作 弥 志 賀 か う 子	巨 岩 と 花 び ら 聖母病院の友人たち 祖母、わたしの明治	筑 摩 書 房 新 潮 社 北 上 書 房
第32回 1984年	吉 行 和 子 尾崎左永子 佐 橋 慶 女	どこまで演れば気がすむの 源 氏 の 恋 文 おじいさんの台所	潮 出 版 社 求 龍 堂 文 藝 春 秋
第33回 1985年	関 千 枝 子 北小路 健 清 水 俊 二	広島第二県女二年西組 古文書の面白さ 映画字幕五十年	筑 摩 書 房 新 潮 社 早 川 書 房
第34回 1986年	田 村 京 子 豊 田 正 子 中 村 伸 郎	北洋船団女ドクター航海記 花 の 別 れ おれのことなら放っというて	集 英 社 未 来 社 早 川 書 房
第35回 1987年	金 森 久 雄 堀尾真紀子 渡 辺 美 佐 子	男 の 選 択 画 家 た ち の 原 風 景 ひとり旅一人芝居	日 本 経 済 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会 講 談 社

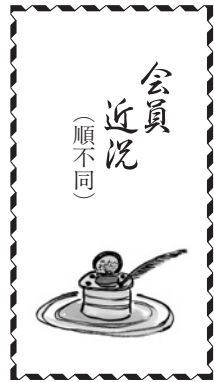
	氏 名	書 名	発 行 所
第36回 1988年	北見 治 一 田中 トモミ 山形 孝 夫	回 想 の 文 学 座 天 か ら の 贈 り 物 院 砂 漠 の 修 道 院	中 央 公 論 社 ア ド ア 出 版 社 新 潮
第37回 1989年	河 村 幹 夫 酒 井 寛 平 原 毅	シャーロック・ホームズの履歴書 花 森 安 治 の 仕 事 英 国 大 使 の 博 物 誌	講 談 社 朝 日 新 聞 社 朝 日 新 聞 社
第38回 1990年	澤口 た ま み 二 宮 正 之 山 川 静 夫	虫のつぶやき聞こえたよ 私 の 中 の シ ャ ル ト ル 名 手 名 言	白 水 社 筑 摩 書 房 中 央 法 規 出 版
第39回 1991年	岩 城 宏 之 林 望 山 崎 章 郎	フィルハーモニーの風景 イギリスはおいしい 病院で死ぬということ	岩 波 書 店 平 凡 社 主 婦 の 友 社
第40回 1992年	加 藤 雅 彦 山 崎 柄 根 山 本 博 文	ド ナ ウ 河 紀 行 鹿 野 忠 雄 江 戸 お 留 守 居 役 の 日 記	岩 波 書 店 平 凡 社 読 売 新 聞 社
第41回 1993年	志村 ふ く み 鈴 木 博 中 野 利 子	語 り か け る 花 熱 帯 の 風 と 人 と 父 中 野 好 夫 の こ と	人 文 書 院 新 宿 書 房 岩 波 書 店
第42回 1994年	伊 吹 和 子 岸 恵 子 中 山 士 朗	わ れ よ り ほ か に ベ ラ ル ー シ の 林 檎 原 爆 亭 折 ふ し	講 談 社 朝 日 新 聞 社 西 田 書 店
第43回 1995年	加 藤 恭 子 徐 京 植 星 野 慎 一	日 本 を 愛 し た 科 学 者 子 ど も の 涙 俳 句 の 国 際 性	ジャ パ ン タ イ ム ズ 柏 書 房 博 文 館 新 社
第44回 1996年	石 坂 昌 三 辻 由 美 柳 澤 桂 子	小 津 安 二 郎 と 茅 ヶ 崎 館 世 界 の 翻 訳 家 た ち 二 重 ら せ ん の 私	新 潮 社 新 評 論 房 早 川 書 房
第45回 1997年	中 丸 美 繪 松 本 仁 一 山 田 稔 加 藤 シ ゅ エ	嬉 遊 曲、鳴 り や ま ず ア フ リ カ で 寝 あ あ、そ う か ね 百 歳 人、加 藤 シ ゅ エ 生 き る	新 潮 社 朝 日 新 聞 社 京 都 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会
第46回 1998年	岸 田 今 日 子 小 林 和 男 細 川 俊 夫	妄 想 の 森 エルミタージュの緞帳 魂 の ラ ン ド ス ケ ー プ	文 藝 春 秋 日 本 放 送 出 版 協 会 岩 波 書 店

	氏 名	書 名	発 行 所
第47回 1999年	小 塩 節 金森 敦子 浜 辺 祐 一	木 々 を 渡 る 風 江戸の女俳諧師「奥の細道」を行く 救命センターからの手紙	新 潮 社 晶 文 社 集 英 社
第48回 2000年	多 田 富 雄 鶴ヶ谷真一 八百板洋子	独 酌 余 滴 書を読んで羊を失う ソフィアの白いばら	朝 日 新 聞 社 白 水 社 福 音 館 書 店
第49回 2001年	青柳いづみこ 三宮麻由子 簾 内 敬 司	青 柳 瑞 穂 の 生 涯 そっと耳を澄ませば 菅江真澄 みちのく漂流	新 潮 社 日 本 放 送 出 版 協 会 店 岩 波 書 店
第50回 2002年	デビットゾベティ 日 高 敏 隆 四方田犬彦	旅 日 記 春 の 数 え か た ソ ウ ル の 風 景	集 英 社 新 潮 社 岩 波 書 店
第51回 2003年	上 野 創 黒 川 鍾 信 古 庄 ゆ き 子	が ん と 向 き 合 っ て 神楽坂ホン書き旅館 ここに生きる一村の家・村の暮らし	晶 文 社 日 本 放 送 出 版 協 会 店 ド メ ス 出 版
第52回 2004年	畠 山 重 篤 松 尾 文 夫 柳澤嘉一郎	日 本 <汽 水> 紀 行 銃 を 持 つ 民 主 主 義 ヒトという生きもの	文 藝 春 秋 館 社 小 学 思 社 草 思 社
第53回 2005年	久我なつみ 滝 沢 莊 一 竹 山 恭 二	日本を愛したティファニー 名優・滝沢修と激動昭和 報道電報検閲秘史	河 出 書 房 新 社 新 風 新 舎 朝 日 新 聞 社
第54回 2006年	小 林 弘 忠 内 藤 初 穂 中島さおり	逃亡「油山事件」戦犯告白録 星の王子の影とかたちと パリの女は産んでいる	毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房 社 ポ プ ラ 社
第55回 2007年	植 村 鞆 音 畑 中 良 輔 山 口 仲 美	歴史の教師 植村清二 オペラ歌手誕生物語 日 本 語 の 歴 史	中 央 公 論 新 社 音 楽 之 友 社 岩 波 書 店
第56回 2008年	堤 未 果 山 本 一 生	ルポ 貧困大国アメリカ 恋と伯爵と大正デモクラシー	岩 波 書 店 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第57回 2009年	平 川 祐 弘 池 谷 薫	アーサー・ウェイリー 『源氏物語』の翻訳者 人間を撮る ドキュメンタリーがうまれる瞬間	白 水 社 平 凡 社
第58回 2010年	秋 尾 沙 戸 子	ワシントンハイツ GHQが東京に刻んだ戦後	新 潮 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第59回 2011年	田 中 伸 尚 内 田 洋 子	大逆事件 死と生の群像 ジーノの家 イタリア10景	岩 波 書 店 文 藝 春 秋
第60回 2012年	井 口 隆 史 小 池 光	安 部 磯 雄 の 生 涯 う た の 動 物 記	早 稲 田 大 学 出 版 部 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第61回 2013年	尾 崎 俊 介	S 先 生 の こ と	新 宿 書 房
第62回 2014年	後 藤 秀 機 佐々木健一	天才と異才の日本科学史 辞 書 に な っ た 男	ミ ネ ル ヴ ァ 書 房 文 藝 春 秋
第63回 2015年	磯 田 道 史	天災から日本史を読みなおす	中 央 公 論 新 社
第64回 2016年	阿 部 菜 穂 子 温 又 柔 原 彬 久	チェリー・イングラム 台湾生まれ 日本語育ち 戦後政治の証言者たち	岩 波 書 店 白 水 社 岩 波 書 店
第65回 2017年	鳥 海 修 原 田 國 男	文 字 を 作 る 仕 事 裁 判 の 非 情 と 人 情	晶 文 社 岩 波 書 店
第66回 2018年	内 藤 啓 子 新 井 紀 子	枕詞はサッチャン 一照れやな詩人、父・阪田寛夫の人生 AI vs. 教科書が読めない子どもたち	新 潮 社 東 洋 経 済 新 報 社
第67回 2019年	ドリアン助川 小 堀 鷗 一 郎	線 量 計 と 奥 の 細 道 死を生きた人びと 訪問診療医と355人の患者	幻 戯 書 房 み す ず 書 房
第68回 2020年	岩 瀬 達 哉 上 野 誠	裁判官も人である 良 心 と 組 織 の 狭 間 で 万葉学者、墓をしまい母を送る	講 談 社 講 談 社

クラブ賞のご支援

今回も次の各社からご寄付をいただきました。
小学館 新潮社 日本放送協会 NHK 出版



上野誠さんのエッセイスト・クラブ賞、おめでとうございます。愛読者の一人として、私の言えることは、上野さんは「心で書く人」です。あたたかい人間味が忘れられません。

(渡辺 綱纜)

残暑(まだ酷暑ですね) お見舞い申し上げます。思いがけず前の日になって七月大相撲の千秋楽の切符が手に入り行ってきました。升席は一人、椅子席は三人おき。すべての音がよく聞こえ、土俵の外の行司、呼び出しの動作・役割もよく見えて、おまけに幕下、十両(六人)、幕内の優勝決定戦と盛りだくさん。暑さとコロナを忘れた一日を過ごしました。

(岡 佳津子)

自 著 紹 介

『漢詩集 遙かなる星漢』

竹中淑子著

人の世の哀歓を、また遙かな宇宙への思いなど外界の事物に感応した心情を、漢詩の格調をもって詠った詩集です。

通常の漢詩集とちがって、読み下し文を漢詩本体の前にもってくる「読み下し文前置方式」とでも言うやり方をとってみました。今や日本人で漢詩を読む人はまれで、読んでもテ、ニ、ヲ、ハの付いた訓読の方だけという人が多く、漢詩を絶滅危惧種にたとえることさえある始末です。それで、漢字の羅列の如き漢詩の違和感なしにその意味を味わっていただけたらとの思いで工夫してみました。



日本古来の和歌、さらには西洋の長い非定型詩などその大意に拠って漢詩にするというおもしろい試みもやってみました。シューベルトの歌曲『冬の旅』の漢詩化もあります。

(西田書店 1600円＋税)

ご寄贈と自著紹介のお願い
刊行から概ね一年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。
会員近況(80字ほど)も合わせてお寄せ下さい。

事務局から

新会員の紹介

岩瀬 達哉（いわせ・たつや）氏
第68回日本エッセイスト・クラブ
賞受賞者。略歴は12ページに。
上野 誠（うえの・まこと）氏
第68回日本エッセイスト・クラブ
賞受賞者。略歴は18ページに。

新会員推薦のお願い

日本エッセイスト・クラブの新会
員をご推薦ください。会員数を一段
と増やすことによって、クラブの一
層の活性化とともに、厳しい財務状
況の改善を図る方針を、9月7日の
理事会で申し合わせました。各位の
ご協力をお願いいたします。

クラブ定款第7条にありますよう
に、正会員となるには、現在の正会
員2名以上の推薦を得て、理事会の

加固 康二（かこ・こうじ）氏



（一社）シニ
ア・環境技術支
援協会相談役。
住友重機械工業
㈱環境施設事業

本部営業本部長、住重環境エンジニ
アリング㈱社長を歴任。著書に『サ
ルの視点』。東京都在住。

菅野 光公（かんの・こうこう）氏
著述家、神奈川大学講師。日本石
油USA副社長を経て、室蘭工業大学、

承認を求めることになっています。

この原則は変わりませんが、会員1
名の推薦でも、理事会に申請してい
ただければ、審査の対象とします。
理事会推薦によって、規約の要件は
十分に満たすことができます。

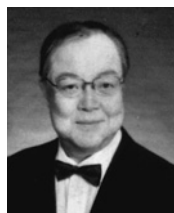
クラブ財務は主に正会員の会費収
入に頼っております。各会員が一人
でも二人でも新会員をご推薦いただ
ければと期待しております。

高知大学、多摩大学、名古屋学院大
学各教授を歴



任。著書に『核
兵器でなく花を
ください』。横浜
市在住。

長野 安恒（ながの・やすつね）氏



声楽家、NP
O法人「言葉と
表現力を育む
会」代表理事。
著書に『明治の

唱歌を作った人たち』正論特集号、
『全国旧制高等学校寮歌名曲選』、同
Part 2など。東京都在住。

野中 康行（のなか・やすゆき）氏



㈱エイアンド
ビアシスト、
岩手県損害保険
代理業協会各顧
問。損害保険ジ

ヤパン㈱退職後、㈲アシストライフ
を設立。著書に『記憶の片すみ』『深
層の記憶』。岩手県在住。

ご寄付のお礼

次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

維持会費 (20年8月まで)

齋藤健次郎 中村登紀夫

特別維持会費 (20年9月4日まで)

栗田 亘 藤原 作弥
秋岡 伸彦 坂本 弘道
今野 耕作 秋山 秀一
秋田 博 小谷瑞穂子
大高 英昭 渡辺 祥子
降幡 賢一 森脇 逸男
内藤 啓子 河合 弘之
松村満美子 大井 玄
佐藤 幸子 柳川 時夫
紺野 猷邦 中村 龍介
八木 美雄 原 彬久
渡辺美佐子 大岩 孝平
萬年 浩雄 原田 國男
堀尾眞紀子 森本 貞子
金子 光美 安嶋 明

坂口 和子	若林 滋
杉山 武子	砂原 和雄
岸 恵子	脇 祐三
山室 寛之	中名生正昭
大宅 映子	戸田 淳子
齋藤 健	東畑 朝子
倉部 行雄	岡 佳津子
松本 仁一	中村 政雄
渡辺 綱纜	吉行 和子
松田 宣子	田中 充子
道川 文夫	並木きょう子
佐藤 きむ	海老沢小百合
杉戸 大作	吉野源太郎
縫田 曄子	猪熊 建夫
柳澤 桂子	武本 宏一
谷村 鯛夢	佐橋 慶女
市川 桃子	川田 志明
杉溪 一言	ドリアン助川
栗山 定幸	尾崎左永子
山本思外里	

吉原さんから多額の寄付

会員の吉原賢二氏より、特別に100万円のご寄付を頂戴しました。

た。クラブ賞の運営等に役立てさせていただきます。心からのお礼を込めて、当クラブからの感謝状を差し上げました。

会員からの寄贈著書

鍋島高明氏著『介良のえらいて 増補版』

竹中淑子氏著『漢詩集 遥かなる星漢』

(7月から9月上旬まで)

2020年度理事会報告

第1回理事会 (20年9月7日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 新入会員の承認
- ・ ホームページの改革、次号会報について
- ・ 第69回クラブ賞審査委員長
- ・ 本日の贈呈式について
- ・ 今後の例会について

10月末までエッセー募集

会員の皆さまのエッセーを募集中です。去年から電子版となつた会報「冬」号（11月下旬発行予定）に掲載します。9月末としていました応募受け付けを10月末まで延長します。

応募エッセーは10年連続10回目の企画です。電子版への模様替えは、印刷等の経費節減とともに、会報を広く社会に発信することを趣旨としております。

応募期間を1ヵ月延長したのも、電子化で時間的余裕が見込まれるためです。

応募要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ新しく入会された方々には自己紹介、近況報告の意味合いも

兼ねて、ぜひご応募くださるようお願いいたします。

なるべく多くの会員の作品を発表するため、2年（2回）連続の応募はご遠慮いただいております。

なお、当クラブのホームページで昨年の会報冬号のエッセーがお読みいただけます。

応募要領

- 一、テーマは自由です。
- 一、本文は1600字。
- 一、200字以内の略歴を添付してください。
- 一、できるだけ、メール添付でお願いします。
- 一、応募原稿は原則としてご返却いたしません。

第69回

日本エッセイスト・クラブ賞

候補作のご推薦を

2021年のクラブ賞審査委員長に松本仁一氏の就任が決まりました。来年2月に、会員および出版社に作品推薦願いをお送りしますので候補作のご推薦をお願いいたします。

審査基準の概要は次のとおり。

- ・2020年4月1日から2021年3月31日までの間に初版として発行された単行本で、日本語で書かれたもの。

・共同著作、翻訳は不可。

・新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。

・他の類似の賞を最近受賞されている方、すでに広く文名を知られている方の作品は除く。

・随想、評論、伝記、研究、ドキュメント、旅行記などエッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男				
理事長	(空席)				
専務理事	秋岡伸彦				
常務理事	栗田 亘	後藤多聞	原田國男		
	よしだみどり				
理事	秋山秀一	梅津時比古	高村壽一		
	中丸美繪	深尾凱子	藤原作弥		
	藤原房子	降幡賢一	堀尾眞紀子		
	松田宣子	森永公紀	森脇逸男		
監事	大高英昭	今野耕作			
事務局長(兼)	降幡賢一				
名誉会長	村尾清一	*	*	*	

会 員 名

(2020年9月7日現在 288名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	井上 卓衛
池内 紀昭	池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦
石原 美光	市川 桃子	市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫
岩瀬 達哉	上田 篤	上野 創	上野 誠	臼井 和恵
鵜飼 哲夫	内池 正名	内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治
海老沢 小百合	榎本 好宏	遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子
小澤 秀雄	小塩 節	小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介
及川 直志	大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩
大空 博	大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大槻 茂
大場 司	大村 智	大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子
岡島 成行	岡田 直敏	岡本 厚	奥山 俊宏	

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	河合 弘之	川田 志明
川良 浩和	菅野 光公	北原 歌子	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三	久我 なつみ
久谷 與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄	倉本 宗剛	栗生 将信
栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信	古庄 ゆき子	小池 光
小池 英夫	小谷 瑞穂子	小林 和男	小松 浩	児島 宏子
後藤 多聞	後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦	

さ行

佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子	佐藤 きむ
佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇	齋藤 健
齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子	坂本 弘道
澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎	三宮 麻由子	志村 ふくみ
塩谷 靖子	篠田 桃紅	下重 暁子	下村 満子	杉江 弘
杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 博	砂原 和雄
関 千枝子				

た行

田中 充子	田中トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實
田沼 敦子	田村 秀敏	田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司
高木 徹	高榎 堯	高階 經和	高島 肇久	高橋 祥友
高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	武本 宏一	谷地 快一
谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果
鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎	ドリアン助川	戸田 桂太
戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸
富永 孝子	富山 和子	鳥海 修		

な行

内藤 啓子	内藤 洋子	中井 幸一	中島さおり	中島誠之助
中野 利子	中名生正昭	中丸 美繪	中村登紀夫	中村 政雄
中村 龍介	中山 士朗	永井 梓	長井 好弘	長田 亮一
長友佐波子	長野 安恒	長屋 龍人	鍋島 高明	並木きょう子
新妻 義輔	二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子	野中 康行
野見山曉治				

は行

葉山美知子	羽中田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	春原 昭彦	樋口 恵子
深尾 凱子	福田 章	福田はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀内 丸恵
堀尾眞紀子				

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村健一郎	正籬 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松原 眞樹	松本 仁一	萬年 浩雄
三島 利徳	水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂
宮本 倫好	宮崎佳代子	村尾 清一	村松 賢一	望月 照彦
桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志
森 美可	森永 公紀	森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男

や行

八百板洋子	八木 恭平	八木 美雄	矢吹 清人	安嶋 明
柳生 尚志	柳澤嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫	山川 静夫

山形 孝夫	山岸 健	山口 寿一	山口 仲美	山下 健
山藤 章二	山室 寛之	山本 一生	山本思外里	よしだみどり
養老 孟司	横山 昭作	吉野源太郎	吉原 賢二	吉行 和子

わ行

和田 亮介	若林 滋	脇 祐三	渡瀬 昌彦	渡辺 祥子
渡辺 綱纜	渡辺 雅隆	渡辺美佐子	渡邊 満子	

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	KADOKAWA
日本経済新聞社	集英社
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2020 秋 (No.72-1)

2020年9月30日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSプロウディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価：本体 各1,000円+税(★は定価：本体1,300円+税) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツアトラウストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パールバス
ブツダ 真理のことば	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクル 夜と霧	諸富祥彦
サン・テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎

万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美
紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブツダ 最期のことば	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禅
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂武
カント 永遠平和のために	萱野稔人
ダーウイン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平

ne
CLUB